

特別対談

山下泰裕の、 「人づくり」

●柔道家・東海大学教授

山下泰裕

(やました・やすひろ)

●明星大学教授

高橋史朗

(たかはし・しろう)

「オリンピックに出場して、メインホールに日の丸を掲げながら『君が代』を聞きたい。そして、柔道の素晴らしさを世界の人びとに広げられるような仕事をしたい」

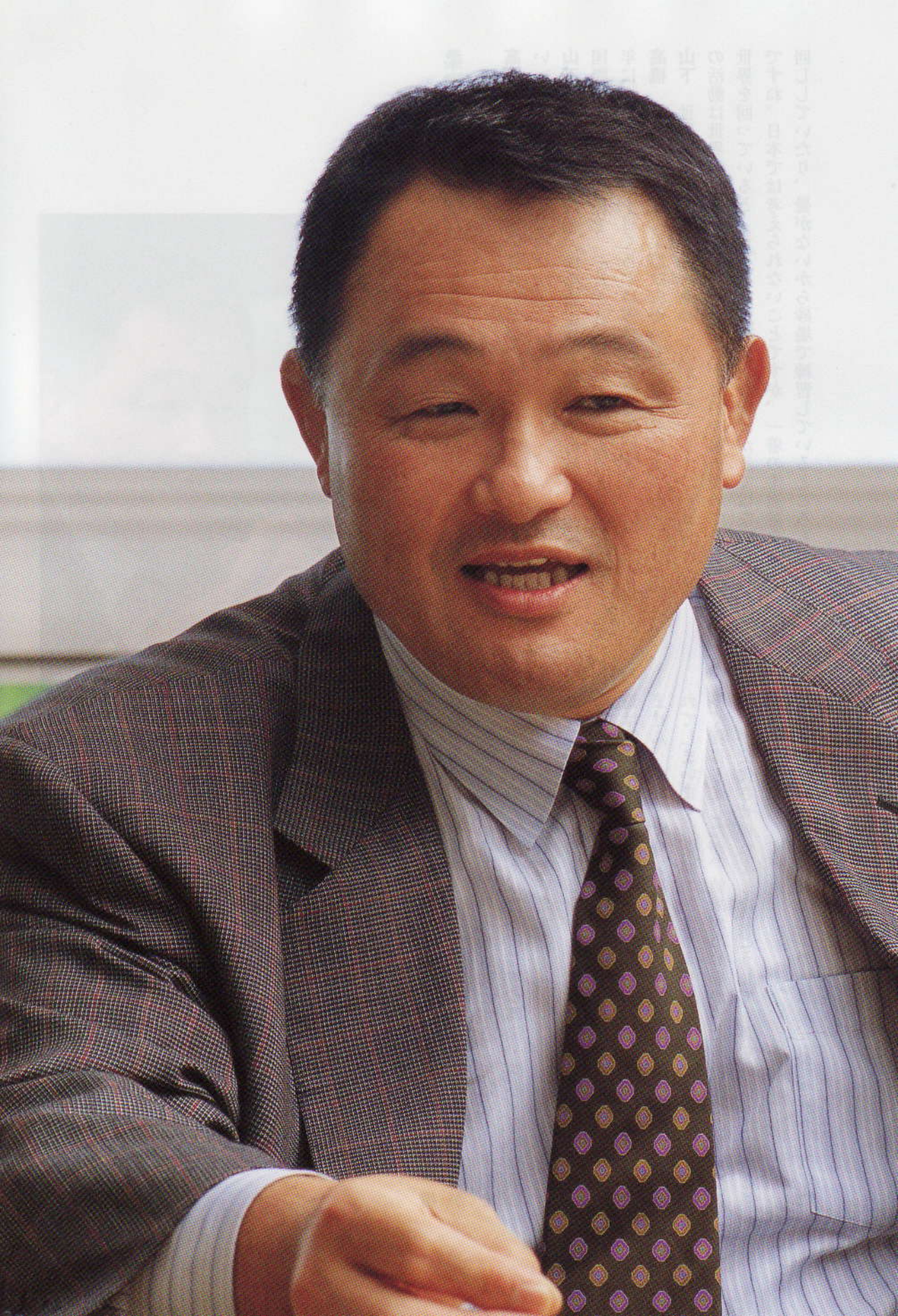
中学二年の山下少年は「将来の夢」という作文にこう書いた。

一九八〇年のモスクワオリンピックでは政治的理由による日本の不参加で涙を飲むも、四年後のロサンゼルスオリンピックでは見事に夢を果たした。

そしていま、柔道の心・日本の心を世界の人びとに伝えるために、年間百日以上を海外で活動する一方で、日本の子供たちのためにできることを担おうとしている。

小淵首相の教育改革国民会議のメンバーであった山下氏と、

中曾根首相の臨時教育審議会のメンバーであった高橋史朗氏が、安倍首相の教育再生会議の動向に迫った。



柔道を日常生活に活かすのが「道」

高橋 山下先生は柔道の普及のために海外に行かれることがたいへん多いと伺いました。

山下 東海大学の関係、国際柔道連盟の関係、外務省の関係、国際交流基金の関係と、それぞれに海外出張がありますから、年に百日から百二十日くらいは海外で活動しています。

高橋 世界の何カ国に柔道は広がっているんでしょうか。

山下 世界の百九十五カ国・地域に広がっています。われわれの活動は世界に柔道を広めていくことが目的の第一なのですが、世界を回っていると、日本みたいな豊かな国ばかりではないんですね。日本では考えられないことですが、一着の柔道着を着回ししていたり、畳がないから砂場で練習しているとところも多



山下 泰裕 やました・やすひろ
柔道家・東海大学教授。1957年（昭和32）熊本県生まれ。東海大学附属高校を経て、80年東海大学体育学部卒業、83年同大学大学院体育学研究科修了。同大学柔道部監督、全日本柔道連盟男子強化部長等を歴任。同強化副委員長、全日本柔道連盟理事、国際柔道連盟強化コーチング理事。段位は八段。教育に対する造詣も深く、教育改革国民会議委員（政府委嘱）、文部科学省中央教育審議会委員といった要職にも就く。神奈川県体育協会会長、NPO法人柔道教育ソリダリティ―理事。84年国民栄誉賞、2007年紫綬褒章受章。著書に「黒帯にかけた青春」「山下少年物語」「勝負の瞬間」「闘魂の柔道」「武士道とともに生きる」などがある。

いんです。そういうところにリサイクル柔道着を贈ったり、指導者を派遣したり、選手の受け入れをするなど援助を行いながら、技術的に高めることのみを目的とするのではなく、柔道を通して日本の心を伝え、日本に対する興味・関心・理解を示してもらいたいと思っています。

高橋 各国はどんな反応を示しますか？

山下 選手時代、全日本の監督時代、現在を通じて、日本の柔道は教育的スポーツだという話をして、それを否定した人はいません。ただ、オリンピックレベルになると、結果が第一とされてしまいます。前回のアテネオリンピックで日本はメダルを多く獲得しましたが、結果が出せなかった国の多くの監督やコーチが交代させられました。どうしても勝ち負けにこだわる傾向があります。

高橋 現役時代は、一九七七年の秋以来、引退された八五年に

至るまで、途中七回の引き分けを挟んだとはいえ、実に二百三連勝という輝かしい成績を柔道界に残され、まさに世界の頂点を極めた山下先生ですが、柔道の心とは何かについて伺いたいのですが。

山下 闘う相手は敵ではない。相手がいるからこそ自分を磨くことができる。最も大切なことは、闘う相手に対する敬意です。

柔道では試合の前後に礼を行います。イスラムの国では、アッラーの神以外に頭を下げる習慣がないので、最初は礼の動作に抵抗を示します。欧米では、日本式のお辞儀はお詫びの姿勢ですから、これまた抵抗感がある。何も悪いことをしていないのに、なぜ謝つてから始め、終わったらまた謝らなければならぬのかと思うようです（笑）。ただ、実際にやってみればうちに、柔道は激しいスポーツであるがゆえに相手に対する敬意が不可欠で、それを形にしたのが礼だと感じるようです。それが分かってくると、イスラム圏の人たちも欧米人も、きちんと礼ができるようになるんです。

高橋 まさに、体感、体得の世界ですね。イスラム圏の人も欧米の人も礼の心を本来持っていたと言えるのではないのでしょうか。

山下 国際柔道連盟の組織には、私の下に五大大陸の理事がいて、アジアの理事はイラン人なのですが、柔道でいちばん大事なものは相手に対する敬意で、それを表しているのが礼なんだといつて、それを普及するためにDVDを出しました。

柔道には「道」と付いています。柔道を創設した嘉納治五郎かのりじごろう先生は技がうまくなるだけではダメで、それを日常生活や人生に活かしていくことが重要で、だから道と付けたのだとおっしゃいました。柔道は最初は投げられることから始まります。投

げられても失敗しても立ち上がっていく。目標をしっかりと持って仲間と力を合わせて実現していく。チャンピオンになるだけではなくて、そのことを通して得たものをいかに日常生活に活かしていくか。これこそが創設者が柔道を通して求めたものなんです。

高橋 そういう話をされると、海外の方はどういう反応を示しますか。

山下 納得されますね。当然、イスラムの国で話すときとフランスやロシアで話すときとは、その国の人が喜んで聞けるように工夫して話しますが。

高橋 ケニアのマータイさんが日本の「もったいない」の心の重要性を世界に向かって発信されていますが、しかし大本の日本ではそういう心を親も教師も失っているように思えるんです。今言われた礼の心も道の精神も、日本人のどこに残っているのかと考えたら複雑な気持ちになります。

柔道人のマナーに心を痛めて

山下 実は私自身が柔道始める前は暴れん坊で、小学校に入学したころにはすでに小学校六年生くらいの体格がありましたから、元気があり余って周囲に迷惑ばかりかけていた子供だったんです。山下がいるから学校へ行きたくないと言われない子もいます。山下がいなくて、私の両親は、柔道で精神を磨けば少しは他人に迷惑をかけない子供になってくれるのではないかと期待して勧めてくれたんです。

高橋 柔道を始めたのはいつですか？

山下 小学四年生のときです。元々元気があるところへもって、

SPECIAL CONVERSATION

山下泰裕の「人づくり」

柔道を着て帯を締めてルールを守っていればいくら暴れ回ってもだれからも叱られないので、夢中になっていきました。でも、私にとっては遊びの延長、中学校に入って出会った恩師・白石先生の指導によって私は真剣に柔道に取り組んでいく中で変わっていったんです。白石先生が熱心に教えてくださったのは、試合で勝つための技術だけではなく、人間としての在り方、心構えでした。

高橋 白石先生の教えで心に残っている言葉はありますか。

山下 はい。「柔道を一所懸命にやることで、強くなるだけではなく、相手を思いやる心、助け合う気持ち、我慢すること、ルールを守ること、力を合わせることに。これは学校では勉強しないけれども人生にとっては大事なことです。でも、柔道だけを一所懸命に頑張ると、勉強を疎かにしたら、柔道を通して得たものを人生で生かして、人生の勝利者になることは難しいだろう。柔道でいちばん大事なのは、柔道のチャンピオンになることではなく、柔道で学んだことを活かして人生の勝利者になることだ」という言葉ですね。このあたりから、私も勝ち負けだけではなく、人生の勝利者を目指してきたように思います。これは嘉納治五郎先生の教えに通じるものがありますね。

もちろん、勝ち負けにこだわることは悪いことではありません。こだわるからこそ自分の限界に挑戦できるし、さまざまな工夫をして努力していけるわけですから。しかし、それを通して人間がつくられていかなかったら、形は柔道だけれども、中身の異なったものになるのではないかと思うんです。

高橋 山下先生は現役を引退後、指導者になってから、「柔道ルネッサンス」を掲げて人間教育に力を入れてこられたとうかがいました。

SPECIAL CONVERSATION

山下泰裕の「人づくり」

山下 指導者になってから気になっていたことがあって、だんだんと柔道人のマナーが悪くなっていくわけです。あるときインターハイの実行委員長をしてくれた私の先輩が、目に涙を溜めて「山下、柔道は本当に教育か、人づくりか、それを胸を張って言えるのか。もう二度と地元では大会は開催したくない。柔道人のマナーは最低だ」と訴えてきたんです。確かにそういう現状があったんです。私は全日本の監督の立場でしたが、原点に返る必要があるのではないかと提言し、それから六年間先頭に立ってやってきました。

高橋 モラルの問題は教え込むというよりは指導者が変わらなないと難しいと思うんです。ルネッサンスでは具体的にはどういうことをされたのですか。

山下 今の選手をだれがつくったかと言えば、先輩であり、指導者です。その指導者たちに、あらゆる機会を通じて、柔道は人づくりだということをスピーチしてもらおう。小学生や中学生からキャッチフレーズを募集したり、ポスターをつくったり横断幕をつくる。中体連、高体連、学柔連、柔道界の人びとが集まる講道館の会に出向いて話をしたり、創設者が目指したもので、柔道界は今、どういう状況にあるのかということを通じていき、「これでいいのか」と一人ひとりに呼びかけたわけです。

子供を変えようとする前

高橋 安倍総理が「美しい国・日本」と言われ、それがどう展開していくのかと、教育再生会議の議論を見ているのですが、美しい国の「人づくり」という視点での議論が足りないと感じています。人づくりが本格的にシステムとして出来上がってこ

ないと、そのスローガンは言葉だけに終わってしまうのではないかと思うんです。山下先生は小渕首相の諮問機関としての教育改革国民会議のメンバーだったわけですが、どのように見えておられますか？

山下 その前に、なぜ柔道人の私がメンバーに選ばれたかというのですが、あの会議を設けるに当たって、各界の約三百名に対して、「今の教育について意見をうかがいたい」という手紙を送ったらしいんです。私はちょうど四日後に海外出張を控えていたのですが、教育の現状について言いたいことがあったので、大学の研究室の電気を消して電気スタンドだけを灯して、外からの電話も取り次がないでほしいと言って、三日間かけてまとめ、出発前に送りました。あとで、小渕総理の下に真っ先に届いたのが私からの文章だったと聞きました。まさかあの山下から真っ先に来たというのでメンバーに選ばれたようなんで



高橋 史朗 たかはし・しろう

明星大学教授・埼玉県教育委員会委員長職務代理者。1950年（昭和25）兵庫県生まれ。早稲田大学大学院修了後、スタンフォード大学フーパー研究所客員研究員、臨時教育審議会（政府委嘱）専門委員、神奈川県学校不適応対策研究協議会専門部会長、青少年健全育成調査研究委員会（自治省委嘱）座長などを経て、現職。感性・脳科学研究会会長、NPO法人師範塾・埼玉師範塾理事長、親学会副会長、親学推進協会理事長、東京都男女平等参画審議会委員などを務める。著書に「教科書検定」「感性・心の教育」（全5巻）「親と教師が日本を変える」「親学のすすめ」等多数。新刊に「親が育てば子供は育つ」「これで子供は本当に育つのか」がある。

すね（笑）。
高橋 どういう内容を送られたのですか？

山下 昨日生まれた子供も、十年前、五十年前、百年前に生まれた子供も基本的に変わりがあるわけではない。その子がどう育っていかかは、家庭環境、学校の環境、地域もある。しかし、最も影響しているのは世の中の価値観ではないか。知識は教えなければ身につかないが、倫理観は教えなくても子供の周りの大人が自分の良心に恥じない行動をしていれば、子供はそれを見て真似ていくはず。今の教育の大変残念な状況は、子供の問題ではなく、大人の有様が反映されているのが子供の姿であると。

かつて日本人は目に見えないものを非常に大事にしてきた。その日本人らしさが消えてなくなろうとしている。お金も地位も物も大事だけれども、それだけじゃない。目に見えないもの

を大事にしていたときに、われわれの人間たる心が出てくるのではないか。本気で今の教育を変えようと思つたら、一大国民運動にしていかなければならないのではないか。それは子供を変えることではなく、われわれ大人一人ひとりが教育の問題を自分の問題として捉え、自分の胸に手を当てて恥じないような生き方をしていくこと。そうでない限り、今の子供たちは良くなっていくとは思えない。と、こういう趣旨を書いたんです。

高橋 まったく同感ですね。今おっしゃった「大人が良心に恥じない行動を取る」「見えないものを大切にすること」という心日本人がなぜ捨てたのかを知りたいと、私は三十歳のときにGHQ文書の研究に取り組みました。六年八カ月に及ぶ占領期間中、日本人が大切にされたものごとく否定されているんです。武道も禁止されています。軍国主義に繋がるという理由からでした。武という文字は戈を止めると書くように、平和の意味の象徴であつたわけです。

山下 かつては、だれが見ていなくとも、お天道様が見ているとか、山の神を拝み、海の神を拝むといった自然に対する畏敬の念がありました。こういうものが失われてしまったことは大きいと思います。

高橋 外国の多くの国では特定の宗教の教義を教えないと宗教心は育たないでしょうが、日本人の宗教心はそれとはずいぶん違つていて、西行が「なにごとのおわしますか知らねども、かたじけなさに涙こぼるる」と歌に詠んだように、まさに目に見えないものに対する畏敬の念であつて、特定の宗教の教義を必要としないものです。私自身は、仏壇や神棚に毎朝手を合わせる父親の姿を見て、宗教心が育つたと思いますし、お盆には迎え火と送り火をして先祖の命とのつながりを感じ、それらを

生活の中で体験的に学んできました。目に見えないものに対する畏敬の念というものは、生活の中で実感しないと道徳の時間に教えられてもなかなか持ち得ないものです。

山下 今は「みんなで破れば怖くない」という感覚で、給食費を払わなかったり、保育料を払わなかったりする親が出てきているそうですね。

高橋 保育料の未納額は三十四億円、給食費の未納額は二十二億円以上になっていると聞きます。貧しいから払えないのではなく、親の責任意識が希薄になっていることの象徴でしょう。

六月一日付の読売新聞が、保育園が勝手な親に困惑しているという内容の記事を書いていましたが、「子供が鬼を怖がるから豆まきが終わってから来ます」と言つた母親がいるとか、自分の子が鼻水を出しているのに、何もしないで、保育士に「鼻水が出ていますよ」と忠告したとか、「私は叱らない主義なので、保育園ではほとんどん叱ってください」という父親がいたとか、親がすっかり変わってしまった。

山下 そんなことでどうやって自分の子供が教育できるのでしようか。昔の藩校や寺子屋で学んだことは、人間としての在り方や生き方に重きが置かれていたわけですね。

親がそうであるなら、教師が頑張らねばならないでしょう。子供にいちばん影響を与えるのは親で、その次が教師だと思ふんです。教師というのは学問を通して自分の人生を語る存在だと私は思ふんです。

子供の問題はわれわれの問題

山下 私が嫌いなのは「いまどきの子供は」という言葉です。

だれがそういう子供を育ててきたのかという視点が抜け落ちて
います。もっと嫌なのは「世の中が悪い」という言葉。これは
自分を第三者の立場に置いて、「われわれの問題だ」とい
う姿勢の対極にある。どんなにちっぽけな存在であっても、人
間としてあるべき姿に沿った行動を行っていく。これが大人の
あるべき姿でしょう。

高橋 私も、教育のカギを握っているのは親であり、教師だと思
います。そこで親の学びの場としての親学、教師の学びの場と
して師範塾を立ち上げたのですが、親としての意識改革を行う
国民運動を展開しようとする、家庭の問題を国や行政が口出
しするのは余計なお世話だというマスコミの論調が急浮上する
んです。今回、教育再生会議が出した親学提言も親学の本質や
中身を知らないマスコミに批判されて引っ込められてしまった。
山下 批判は勇気があって格好がいいように見えますが、実は
簡単なことです。良くなる方法を提案することは難しいし、実
行に移すことはもっと難しい。また、実行に移して成果が上が
るのは時間も掛かるし、大変な努力を要します。マスコミが批
判するのは大いにけっこう。ただし、批判するのなら、状況を
どう変えていくのか、そのままでもいいのかを提示するくらいの
姿勢を問いたいですね。

子供の場合、すべての決定権や選択権は親側にあります。若
い親の現状を考えると、親学のようなものが必要だと思います。
親学の教科書を読ませていただきましたが、すぐに実行できる
ことが書かれ、それがどういう影響を及ぼすかも示されていま
す。私は押しつけでもなんでもないと思いました。

高橋 今の親はそういう情報に接する機会がなかなかありません。
毎日新聞が世論調査をして二十代の六八パーセントは親学

SPECIAL CONVERSATION

山下泰裕の「人づくり」

提言が必要だと答え、二八パーセントが反対しています。若い
世代は親として何が必要なのかという情報を求めているわけ
です。それをマスコミがよけいなお節介をすると言うのは、国
民が求めているものへの否定であり、非常に残念だと思ってい
ます。

山下 親が気づいていない知恵や情報をどんどん出してあげる
ことのどこに問題があるのでしょうか。これが二十年前に出版さ
れていたなら、私も親としての責任をもう少し全うできたのなか
なと思いましたよ。

「親学の教科書」に何十という知恵が書かれています。その
中の一つか二つでも取り入れれば、子供への向き合い方が違っ
てくる。それだけでも、世の中を変えていく力になる。

高橋 教育再生会議が六月一日に発表した第二次報告のとき、
記者会見の席上で子育てに関わる科学的知見の例が資料として
配布されたんです。日本学術会議が報告した乳幼児にテレビが
及ぼす影響とか、文科省の「情動の科学的解明と教育等への応
用に関する検討会」の報告書の中の、対人関係能力や社会的適
応能力の育成のためには愛着形成が重要だとか、子供の心の健
全な発達のためには基本的生活リズムの獲得や食育が重要だと
か、客観的な報告として出されているものをマスコミはまった
く報じませんでした。朝食を作れと言われたら「余計なお世話」
と親は思うでしょうが、学力との関係を示すデータを出せば、
作るようになる家庭が多いと思うんです。

山下 国が率先してやれという、国家権力に押しつけられる
といった印象を持つんでしょうね。マスコミは、日本のように
ある程度成熟した社会にあつては、今のようにならぬ批判するだ
けではダメだと思ふんです。本来どうあるべきなのかとか、目

私が嫌いなのは「いまどきの子供は」という言葉です。もっと嫌なのは「世の中が悪い」という言葉。

これは、「子供の問題はわれわれの問題だ」という姿勢の対極にある。どんなにちっぽけな存在であっても、人間としてあるべき姿に沿った行動を行っていく。これが大人のあるべき姿でしょう。

指していくべき方向はどちらなのかという視点で責任ある報道をしてほしいと思いますね。

高橋 第二次報告では、徳育を従来の教科とは異なる新たな教科として位置づけるという内容が盛り込まれました。これは教育改革国民会議で山下先生が提唱なされたことですね。



山下 再生会議で出てきた報告を見ますと、その多くは教育改革国民会議で出てきていたものです。議論の席上だけの話で前に進んでいなかったことが、今回は提言というかたちで出てきて、前に進むうとしていいると感じますね。

高橋 奉仕活動にしても、道徳の教科化についても国民会議で出てきた議論が受け継がれていると言えます。

山下 私が道徳を教科にと主張した理由は、現実の社会には、人格的に優れた教師もいますが、サラリーマン教師もいるわけですね。人間は言っていることとやっていることに大きなギャップがあれば、信頼されません。徳育を子供たちに教えるには、それなりの覚悟が必要ですし、すべての担任にやれというのは

無理だと思ったので、専門家が不要じゃないかということ、中学校は道徳、高校は人生科という提案をさせていた。ただ、専門家と言っても、知識を豊富に持っているだけではなく、人間の在り方とか生き方を自分の言葉で語ることができる人材が必要だと思いますね。

ゆとり教育とは何だったのか

山下 国際学力テストで、現在学力がいちばん高いのがフィンランドで、二番目が韓国ですか。ゆとり教育はフィンランド方式を目指したが、再生会議で目指そうとしているのが韓国方式です。フィンランドと韓国は正反対の教育方法なんですね。

つまり、ゆとり教育から大きく転換しようとしているようなんですが、私は、ゆとり教育が目指していたものは、基本的には間違っていないかと思うんです。土曜日の在り方も、総合的学習の時間もそうです。

高橋 ゆとり教育が批判の狙上（そじょう）に上るときは、決まって学力低下問題がセットのように出てきますが、ここに実は混乱があつて、ゆとり教育の実施にあたり出てきたのが学校週五日制ですが、ところが、これは教育の論理から出てきたものではなく

て、労働の論理から出てきたものなんです。一般の労働者が週休二日となっているのだから、教師にもゆとりを、ということ。それを言うとき国民は納得しませんから「新しい学力」という大義名分を付けた。当時私はよみうりテレビの深夜の討論番組で司会をしていて、文部省関係者たちを呼んで聞き出したら、労働の論理が本音で、それを正当化するために「新しい学力」を打ち出したと認めましたね。

山下 ゆとり教育が打ち出された背景には、子供たちの勉強への意欲の低下、忘却率の高さ、疲労感を訴える子供の増加が言われ、その解決方法として、それまでの一方の学習から双方の学習へとか、問題発見・解決型の学習へとかが提起され、点数を取る学習から本当の学びへというのが趣旨だったと思うんです。化学で理論を学ぶ時間を少なくしても実験を行ったり、生物の時間に屋外に出て動植物に接したり、教科を横断して学びの本質を体感させる総合的学習の時間を設けたりしたことには大いに意味があったと思うんです。それが現場に浸透していくためには、五年でも十年でも、ねばり強く文部科学省が繰り返しサポートしなければ、うまく機能するはずがなかった。制度さえ変えたらあとはうまくいくと、当時の方々が考えていたのであれば、大きな間違いだと申し上げたい。目指したことに問題はなかったけれども、システムを機能させる努力がほとんどされてなかったと感じるんです。

高橋 私は、ゆとり教育が学力向上かと、二者択一的に語られていることが問題だと思っています。

中曾根首相の臨時教育審議会（臨教審）にしても、小淵首相の教育改革国民会議にしても、安倍首相の教育再生会議にしても、教育問題を議論する機関が設けられたのは、子供の現状を

SPECIAL CONVERSATION

山下泰裕の「人づくり」

見て、教科教育だけではないあと半分の教育である人間教育をどうするのかというところから始まった動きだと思うのです。

私は臨教審の専門委員として議論に加わったのですが、ちょうどこのとき、教育サミットが京都で開催されて、四十四カ国の文部次官クラスの人びとが集まって議論をしました。ここで、世界の子供たちの共通の問題点として上がったのが、「アイデンティティ・クライシス」でした。人間らしさの欠落です。教科の基礎基本は教えても、人間としての基礎基本が欠けていたという共通認識を持った。このとき、「ニューベリック」という言葉が出てきて、人間教育の基礎基本がこれからのカリキュラム改革の大事なポイントであることが確認されて閉幕したわけです。そこから文部省の「新しい学力」という考え方が出てくるのですが、最初の時点では人間教育という考えを含んでいたんです。

山下 確かに、ゆとり教育と生きる力はリンクしていました。高橋先生は二者択一ではないけどおっしゃいましたが、実際には、今後の日本が韓国型で進むのか、フィンランド型で進むのかという議論になるでしょう。そこで私が言いたいのは、いずれにしても、「制度を作ったから実行しなさい」ではうまくいかない。制度を作ってから先が大事で、そこにかんがいのエネルギーを投入してほしいと思いますね。

高橋 生きる力とおっしゃいましたが、特に日本の子供たちは他者とともに生きる力が欠けています。他者とともに生きる力は、自己制御能力と対人関係能力が大きな要素となり、人間力の柱にもなるわけで、ゆとり教育にせよ学力向上にせよ、生きる力をセットで考えなければいけないのに、今は基礎学力という読み書きそろばんの話になってしまっただけで、学力低下している

からそれを取り戻そうと言っている。学力低下を批判している人はそこだけを見ているんです。だから、単なる教科の基礎基本ではなくて、生きる力を支える人間教育の基礎基本という視点を念頭に置かなければならないと思いますね。

山下 おっしゃるとおりですね。

高橋 ついでに申し上げますと、ゆとり教育が教育現場にもたらしたもう一つの問題があつて、「指導から支援へ」というキーワードが教育界に広がつたことです。子供の活動を支援するのが大切だから、教師は一步引けということを学校教育官が全国の教育者が集まつた席上で言つたんです。それを教育の現場が「指導してはいけない」と受け止めた。いまや、幼稚園や保育園にまで、「指導から支援へ」は行き渡つています。本来、指導があつてこそ支援が成り立つものなのに、指導と支援を対立的に捉えたものですから、若い教師が板書の基本を軽んじ、基礎基本を教えることが疎かになつたわけです。つまり、指導から支援へという文部科学省の指導が誤解を生んで、ゆとり教育の誤解に繋がりが、それが学力低下に繋がつた面があると思います。

山下 この問題には複雑な要素が絡んでいるわけですね。整理して考えなければならぬ。

高橋 例えば国語で「読む」という基礎学力を育む時間を三割削減して、「伝える力」という「新しい学力」を育むことに力を入れた考え方が間違つていたのです。そこで「確かな学力」と言い換えたのですが、文部科学大臣が変わるたびに変わったのでは現場は混乱するばかりです。学力に古いも新しいもありません。その対立した問題を超越する試みとして脳科学に基づく学習指導要領の作成を目指しています。これまで日本人

SPECIAL CONVERSATION

山下泰裕の「人づくり」

が培ってきた子育ての知恵が脳科学の知見によって実証されつつあります。脳の発達に依じてどういう内容をどういう方法で与えるのが最善の方法かというのは、多様な価値観ではなく、そこに不易な教育の原理があるということなんです。子供の成長発達を保障する科学的知見に立脚した学習指導要領を確立できれば、これまでの不毛な学力論争から脱皮できるでしょう。

スポーツが人間教育の一端を担う

山下 人間教育の基礎基本とおっしゃいましたが、今の子供たちにはコミュニケーション能力が低下しています。運動能力も低下し、精神的にも弱い。こういう時代だからこそ、スポーツの果たす役割があるように思ふんです。ここでいうスポーツは競技のためのスポーツではなく、自ら進んでやるもの、そして楽しむものです。スポーツには相手が存在します。仲間と力を合わせることを。相手を思いやること。ストレスに対する耐性を作り、精神的ゆとりをもたらすこと。リーダーシップも学べます。人間の基礎基本の多くを体験できるのが実はスポーツなんです。本来はこういうところを担わなくてもいいかもしれないけれども、一步踏み出して責任を担っていきたいと思つてい

高橋 子供の荒れが酷ひどかつた中学校で陸上競技で十数年連続全国優勝に導いた原田隆史さんは、教師塾を組織しておられます。北星余市高校の教師から横浜市の教育委員を経て、今は教育再生会議のメンバーでもある義家弘介さんも教師のための組織をもつておられ、杉並区には杉並師範館という教師の研修組織があります。私自身は師範塾を九州と埼玉で開いています。そ

ういうところが集まって緩やかな教師塾、師範塾連合を作り、シンポジウムや講演会・研修会を年に何回かやれないかと話しているところなんです。今は、教師も自信を失っていますし、親も自信を失っています。教師自身が人間力を鍛える場としてこういう企画を実現していけば、教師の自信にもつながるのではないかと思うんです。

山下 緩やかなネットワークというのは大事な視点で、私も全日本柔道連盟ではかの競技団体と協力しながらやっていこうと思っているんです。神奈川県では体育協会長という任をいただいていることもあり、いじめの問題に取り組んでいます。柔道界だけでなく、サッカーやラグビーなどいろいろな団体と協力して青少年の健全育成に力を入れているのですが、例えば、いじめの現場に遭遇した体育会系の子供が、「おい、やめようよ」と声をかけたり、いじめられている子に「こっちへおいでよ」と言って守る。スポーツで鍛えた子供たちがそういう対応ができるようになる、状況は変わってくると思うん



です。神奈川で成果が上がったなら、全国に発信していく。そして志を持った全国の地域と協力しながら進めていくと、大きなうねりになっていきますね。

高橋 日米中の青少年の意識調査で将来の夢を聞くと、アメリカの高校生は医者と弁護士、中国は経営者や管理者、日本は公務員、従業員と答えたそうです。日本の子供は雇われ志向で、自分で切り開いていくという夢がない。夢や目標を持たせられるかどうかは指導者の大きな条件ではないかと思えますね。

山下 大人が人生や世間に疲れていたなら、子供は夢を持ちようがありません。子供たちに夢を持たせたいと思ったら、やせ我慢しても子供の前では夢を語るべきで、愚痴を言うべきではないと思います。

高橋 アーマスト大学のクラーク博士が「少年よ、大志を抱け」と言いましたが、今は「親たちよ、大志を抱け」教師たちよ、大志を抱け」と大人に向かって言わなければならぬ時代ですね。山下 これからの時代、教師は大変な時代だと思います。私は、だからやりがいがあると考えるんです。自分が理想を抱いて夢を抱いて、自分に正直に生きながら、学生たちと接していける。これほどやりがいのある仕事はないでしょう。子供と一緒に成長していけるというのは素晴らしいと思いますね。

日本の子供には他者とともに生きる力が欠けています。

他者とともに生きる力は、自己制御能力と対人関係能力が大きな要素となるわけです。

ゆとり教育にせよ学力向上にせよ、生きる力をセットで考えなければいけないのに、

今は基礎学力の向上しか見ていない。単なる教科の基礎基本ではなく、生きる力を支える人間教育の基礎基本という視点を念頭に置かなければならないと思いますね。